

国際化と日本人の思考様式

田 浦 武 雄

- I 日本の国際化
- II 国際化と教育
- III 国際的視野の育成—ライシャワーの遺言
- IV 歴史を心に刻む—過去の反省と民族共生の倫理観

I 日本の国際化

I-1 国際化の必要性

日本がこれからの世界で重要な役割を果たし、世界の文化の中で輝いていくためには、国際化することが重要な課題の一つである。そのためには、わが国民の考え方や思考様式の現実の特色を捉え、その長所や優れている特色を生かし、その短所や問題点を克服していくことが重要である。

日本人の特徴と課題についての注目すべき主張として、エドウィン・O・ライシャワー (Edwin Oldfather Reischauer 1910-1990) の見解をあげたい。かれは、アメリカのハーバード大学日本史及び日本文化研究の教授として活躍し、1961年から5年間駐日アメリカ大使としてもその働きを示した。また同氏は、これまで、日本史や日本文化についての多くの著書を残したが、その中の一つ、1989年の『日本の国際化—ライシャワーとの対話』¹⁾で、日本の国際化の問題について、多くの示唆を与えた。それをまとめると次のように言える。

(1) 日本人の特徴について

(1) — ① 自分たちはユニークで特別な存在であるという気持ちが強い。

(1) — ② 集団志向性の傾向が強い。

(1) — ③ 世界の政治・経済活動に積極的に参加しないという傾向がある。

(1) — ④ 美的感覚にすぐれている。これは直観的理解を尊重する手法と関係している。

(1) — ⑤ 多様性を尊重し、互いの違いを認めあひ、そこから一致点を探す努力をするのに慣れていない。²⁾

(2) 国際化のために必要なこと

(2) — ① 国際化のためには、意見を表明し、相手を説得するコミュニケーションのルールを身につける必要がある。³⁾

(2) — ② 世界の生存のために日本がなすべきことを学ばなければならない。世界の相互依存の深さを学び、世界の多様性を、「人間の目」で知ることが重要である。それには世界を丸ごと自然に呼吸してきた帰国子女の経験がかけがえのない価値をもっている。⁴⁾

(2) — ③ 外国人に会ったこともなく、外国語を話さない田舎の人で、テレビや新聞、読書などで勉強して、「日本はもっと広い見方を世界にしなければならぬ」という理解に達した人(存在する国際人)が多くいることが、これからの日本では切実に必要になってくる。⁵⁾

日本人の特徴と国際化のために必要なことについてのライシャワーの主張の要点を述べたが、次に若干の検討を行いたい。

(1) — ① 日本人が特別な存在であるという気持ちが強いという主張は、現在も当たっていると思われる。

(1) — ② 集団志向は集団を自己の行動の価値づけの基準にする思考様式を言うが、個の尊重や人類性の重視とは縁遠い考え方をうみだしてくる。

(1) — ③ 日本は多くの財政赤字を抱えて、世界の政治・経済活動に十分に参加し得ない状況もあるが、自国がしなければならぬときには的確な行動をする必要があることを、ライシャワーは指摘したものとすることができる。

(1)一④ ライシャワーは、日本人の美的感覚の発達度は、世界でも最適の水準にあるとして評価している。この点はますますその長所を伸していくように留意しなければならない。

(1)一⑤ 多様性を尊重し、互いの違いを認めあって、一致点を探す努力は日本人に不足していることを指摘したものである。意見が対立すると感情的になり、反発する傾向が多い民族性を改めていく必要を痛感させられる。日本が世界の孤児とならないためにも、このことの重要性を認識しなければならない。

(2) 国際化のために必要なこと

(2)一①に関しては、「稼動する国際人」としてのあり方を述べた点で評価できる。思想を鍛え、それを説得的に主張できるコミュニケーション能力をたかめることが重要である。巧妙に英語を操っても、内容のないものは有害で、しっかりとした思想や哲学のうらづけがあることが大切である。

(2)一②に関しては、残念ながら日本の学校における受験競争のなかで、帰国子女の貴重な経験は伸ばされることなく、おしつぶされている感がある。帰国子女の経験を生かし育てることができるかは、日本の将来の国際化を左右するものになるだろう。

(2)一③に関しては、「存在する国際人」が庶民の間に育つことの重要性を指摘したものと評価できる。国際化に対応する国民の質は、日本の未来を左右する基盤となるものであり、国際化の土台となるものとして重要である。

I-2 国際化の概念

国際化ということばは、多義的である。そのうち代表的と思われるものをあげてみる。

①E・O・ライシャワーは、『日本の国際化』の中で、次のように述べている。「単に外国と接触するという広い意味の国際化よりも、世界が一つの共同体として連帯するという狭い意味の国際化が大切である」。⁶⁾「日本人にとって、とくに国際化とは、日本人一人ひとりが世界を共同で担う人類の一員という広い視野をもつ人間に変容することである。そのためにはコミュニケーション能力と広い見方をもって世界に対応することが不可欠であ

る」。⁷⁾このように、国際化は広い視野をもつ人間に変容することが重要であることを指摘している。

②京都大学名誉教授で比較教育学者の小林哲也は、その著『国際化と教育—日本の国際化を考える—』で、国際化については次のように述べている。「ある論者は、物、金、人、情報が国境を越えて自由に行き来する状況を指して国際化と呼び、ある論者は、貿易や金融の自由化などの状況をつくり出す手段や政策をいい、他の論者はそうした状況や手段に対応する、異文化への寛容といった心構えや文化の異なった人々との共存を国際化として論じている」。⁸⁾こうした主張をふまえて同氏は、国際化を上述のような状況、それを進める手段、そうした状況や手段のための心構えなどを包括した現象として把握している。

③教育社会学者黒柳晴夫は、愛知学院大学教授の時に書いた論文「生涯学習と国際教育」の中で国際化を次のように定義している。「国際化とは、物事を複数の国の協調のもとにすすめて共存を図るとともに、世界の発展に貢献する過程である」。⁹⁾このように国家間の共存と世界発展への貢献を強調している。

④東京学芸大学教授で異文化間教育学の佐藤郡衛は、その著『新訂国際化と教育—日本の異文化間教育を考える—』の中で、国際化について述べている。¹⁰⁾その中心主張は次のとおりである。

国際化はインターナショナリズム(internationalism)、トランスナショナリズム(transnationalism)、グローバリズム(globalism)という言葉があてられる。インターナショナリズムは、国家同士の相互関係の強まりを示す言葉である。トランスナショナリズムは、国境が消失した状況を指し、世界との相互依存、異文化との接触の拡大を意味している。一つの社会の中で、言語、文化を異にした人びとが住む現象が日常化してくる。グローバリズムは、世界の相互依存関係が強まり、世界全体が一体化した状況を指す言葉である。経済大国になった日本が、地球社会全体に一定の貢献をはたすことが国際社会から期待されている。

同氏は特にトランスナショナルな人の移動に注目しており、日本社会内部の文化や価値観の均質性に疑問が出されており、異文化共生の社会への

対応が迫られている。この課題にこたえるのが異文化間教育という学問領域である。

以上のように国際化の定義は一様ではないが、総括的にみると、ライシャワーも述べているように、国際化の概念は、国と国との交流、個人と外国人との交流という広い意味の概念にとどまらず、国際関係、外国人との関わりや交流は、かくあるべきだという意味の概念として国際化を捉えていく必要がある。かくあるべきだというのは、広い視野にたつこと、異文化理解と異文化との共存の態度が必要であり、国際化はすでに出来あがっているものの記述的概念 (descriptive concept) としてよりも、改革し改善すべき処方的概念 (prescriptive concept) として捉えていくところに、重要な特色があると、私は考える。

国際化のためには、自国文化の長所を理解し、他国の文化に建設的に接し、両者を客観的に省察し、国際化が必要とする能力・価値観・態度、いかにすれば、自分とは異質の文化や民族と共存し共生していくことができる能力や価値観や態度、これらを総合した国際性の育成がきわめて大切であることを示している。

日本のように島国という地理的条件の下で、永い閉鎖国政策をとって外界から孤立し、明治維新以後富国強兵の政策をとり、欧米文化に対する劣等感とアジア文化に対する優越感を持ち、日清、日露、太平洋戦争というように戦争の世紀を経験した日本民族にとって、国際化は、なかなか容易ではない課題であるが、21世紀には是非とも達成しなければならない課題である。この課題を達成できなければ、日本の将来は暗いことになる。一般的に日本人の特性としては、勤勉さ、仕事へのいそしみの態度もあげたいと私は考えるが、この態度も広い展望をもっていることが大切である。

II 国際化と教育

II-1 同質性の行き過ぎの是正

ライシャワーは、その多くの著書を通じて、国際化の上での問題点を指摘しているが、教育によって国際化を実現すべきであるとする主張は注目に値するので、この点を検討してみよう。特に『日本の国際化』で展開されている論議をとりあげ、それらについての若干のコメントを行いた

い。まず同質性の行き過ぎの是正についての同氏の中心主張をまとめてみよう。

日本の国際化の妨げになっているものとして、日本社会における同質性の行き過ぎがある。特に教育の現場で、これが強調されすぎると、子供の才能の発達が阻害され能力が限定されてしまう。アメリカでは個性尊重が行きすぎ、集団としてのまとまりに欠けるきらいがあるが、日本は逆の極端で、両者はもう少し中庸に向けて歩むことが必要である。アメリカでは、個性重視が思想の根底にあるから、日本のように異質を排斥して何が悪いと開き直る発想はない。またアメリカでは日本のように国全体で独自性や民族の純粋性を主張し、日本的でない要素を排除することは良いことだと威丈高に発言することはない。

どこの国でも多少の「いじめ」は存在する。しかし一人の弱い人間を、寄ってたかって精神的に痛めつけ、先生も見てみぬふりをし、「いじめられる生徒に原因がある」と主張する。日本では、自立と協調のルールを教えることと、皆と同じにするように強調することとの違いが分かっていない。

古い考えを「しみ」のように持ち続ける老人たちが、権力組織や教育界を支配し、古ぼけた発想が亡霊のようにさまよい、戦争中の隣組のように右へならえを強要する。日本では集団への順応の強制が、危険なレベルに達している。

多様性を奨励し、画一化を避ける努力をしてもなお、十分に多様性が育つか疑問に思うほど、日本は均質社会である。将来の日本にとって、教育における個性の尊重と多様性こそが中心的命題である。

同質性は①集団への無批判な服従を強制していること、②外の世界への目配りがおろそかになりがちであること、③画一化の教育に陥り、創造力や天才的ひらめきが要求される分野で重大な欠陥をもつことになる。¹¹⁾

以上、ライシャワーが日本人の思考様式の面で、同質性の行き過ぎた尊重—それはうらがえせば、異質性の排除を意味する—は日本の国際化の妨げになっていることを主張したものであるが、傾聴に値する主張がみられる。他方、日本でも近年高齢者で学習意欲のたかい人たちがみられるよ

うになり、新しい発想を身につけてきている人も出ていることは見おとしてはならないと思われる。

かれはすでに1973年の著書『地球社会の教育』(Toward the 21st Century: Education for a Changing World)で、国家に狭くとられることなく、世界コミュニティの建設に目をむけるべきであるとして次のように述べている。「今日、世界コミュニティが急速に、人間協力の究極の単位としての国家にとって代わりつつある時に、我々は全人類のアイデンティティのセンスや世界コミュニティへの感情的結びつきを確立することに十分でないということが、問題である」。¹²⁾すなわち世界コミュニティの建設のために、全人類へのアイデンティティのセンスと結びつきを固めることの重要性を指摘していることに注目したい。

II-2 コミュニケーション能力の向上

日本人の同質意識を育ててきた集団志向性には日本人のコミュニケーションのあり方が関係している。ライシャワーはこのようにコミュニケーション能力が重要であるとしているが、その中心主張を要約してみよう。¹³⁾

世界という巨大なコミュニティでは、互いの考え方を正確に理解できなければ成立しない。世界を存続させる絶対的条件は、コミュニケーションである。

外国人との関係では、価値観も行動様式も違うので、話し合わなければ誤解は拡大され、非常に奇妙な結果を生む。日本人が国際化を図るには、意見を明確に表現し、相手を説得するコミュニケーションの基本的ルールを身につける必要がある。

日本が国際化をするためには、議論のさいに科学的明晰さや論理的明確さが要求されるが、日本人の議論はきわめて曖昧で、明確で建設的な結論がでない。日本的なコミュニケーション、つまり「察しの美学」は、本質的には同質社会に有効な情報回路であって、日本人と外国人が会話する場合の基本的な回路は、異質の存在の間でも有効に働く基盤上に設計されていなければならない。

日本は非常に規制が強く陰に陽に統制された社会で、人間を鋳型に押し込む傾向がある。これは

集団志向性と関連するが、個性が抑えつけられ、そのはげぐちが異質なものの、弱いものへの敵意や憎悪という形で現れる。自由な校風の学校には、陰湿で深刻ないじめは起きていない。

日本は民主主義を建前としてめざしているが、現実はどうか。ライシャワーは日本の民主主義が未成熟であることについて論じているが、その中心主張をまとめてみよう。

総理は日本では党に左右され、党は選挙民に左右され、選挙民である国民は国際的な課題には無関心で、問題の核心を理解していない。その解決のためには、教育システムの確立が急務である。それには問題の所在を早く知らせる情報システムの整備も必要になってくる。このまま成り行きにまかせてずると事態を引き延ばすことは、破滅への一本道を走ることになる。

このように国際化のためには、コミュニケーション能力の向上や民主主義の認識の改革が重要であることを指摘しているのは適切である。

II-3 国際化教育の視点

ライシャワーは、国際化のための教育のあり方について述べているが、その中心主張をまとめてみよう。¹⁴⁾

日本は先進国でありながら、異常に国家意識が強く、それが問題を起こしている。それを克服する真の国際化教育が必要である。それは第一には、個性を尊重しながら他者の立場に立てる教育である。自分は何よりも自分という個人であり、それ以外の何者でもない。つまり個の自覚である。第二に、現代という危機の時代の人類の一員であることを確認する。第三に、たまたま日本という国家に属していることを学ぶ。これが国際化教育における世界認識であり、自分と世界と国家を位置づける国際化教育が、いま最も大切な課題である。しかし多くの人びとには、その教育が世界の危機にさいしてもつ意味すら理解できていないように思われる。

在来日本の教育は、集団の一員、国家の一員であることを教えたが、個の確立を抑え、世界・人類の一員としての意識を稀薄にさせてきた。

自分の小さな集団がよくなることを特に考えるのは、人類の多くが共にもつ人間の弱さである。

問題は、その個人の利己主義と集団の利己主義を、世界共同体の建設に妨げにならない程度にどうやって閉じ込めておくかである。人間がもっている動物的本能やエゴイズムを克服するのは、教育の力による変容しかない。

このように、ライシャワーは、個性を尊重しながら他者の立場に立てる教育を強調し、次いで人類の一員である視点をあげ、最後に国家に属していることを学ぶという、重点のおきどころの順序づけをしている。このような主張は、国家主義や国家観念を重視し、教育改革といえば、天皇中心の愛国心を強調したがる立場の人々にとっては、抵抗があり同調しがたい主張だと思われる。しかし日本人の思考様式というか、価値の座標軸として、個の存在の視点や人類の視点はまことに稀薄であったことへのライシャワーの批判と忠告は、重要な価値があると言える。

日本人の思考様式や価値観の座標軸として、特に人類の視点というか、人類的志向（人類の視点を重視した思想・行動の方向づけ）を重視すべきであることは、日本人にとって、21世紀の課題とすることができる。海外で建設的に活躍する日本の若者が増えていることは、将来の日本に望みがもてる証拠だと言うこともできる。

II-4 文明の危機を乗り越えるために

一創造性の育成

国際化を妨げる日本人の発想と思考様式をいかに変容するかが問題であることを、ライシャワーは指摘しているが、その中心主張をまとめてみよう。¹⁵⁾

アジア諸国を日本が援助する際には、援助してやるのだから被援助国の国民感情は二の次だという意識ではなく、その国の歴史的経緯や国民感情への慎重な配慮から出発しなければならない。援助するほうでは慎重しすぎると思っても、受け取る側では傲慢だとか無神経だと思いがちである。明治の日本は軍艦と工場に、国家と民族の未来をかけたが、現在の日本は国際化の成否に民族の生存がかかっている。

国民の意識改革で大きな役割を担うのは学校教育である。教育を変えても、子供たちがすぐ社会の指導力をにぎれないのは事実である。しかし新

しい世界に適応できる世代を生み出すか、古い世代のコピーを生産し続けるかによって、五年後、十年後に与える影響は非常に違ってくる。

日本の教育では、自分自身で問題を発見する問題発見型学習は重視されていない。論理的思考や独創的発想法も、大学入試にはプラスにならないというので、高校までの教育から締め出されている。

日本式授業では、子供は一夜漬けの棒暗記には強くなるが、自分で考え、自分なりに表現する力が非常に弱いまま育っている。

大学側も創造的発想法や論理的思考法をあまり重視しないし、学生も熱意を注がない。今日の社会で非常に重要な機能を担うこれらの方法が、日本教育から抜け落ちている。そのため、日本人の創造性は芸術的感性として保たれてはいるが、科学技術など知的な面では発揮されていない。ノーベル賞に値する論文は、暗記や受け売りからは生まれにくい。

少なくともアメリカの学校では、学生が最低限、「世界は今どのような問題を抱えているか」、「ある現象と別の現象の関連性はどこにあるのか」を身につけるように教育し、討論によって思考能力が伸びるように指導されている。

討論によって問題点を明らかにし、より優れた論理にたどり着く知的作業は、教科書に不易の公準として書かれている文章の丸暗記とは違っている。日本の教育もその理念と方法を、暗記至上型から問題解決型に変えることが必要な時期にきている。

このようにライシャワーは、文明の危機をのりこえ、子どもの創造性を伸ばすために、画一的教育でなく、問題解決型の学習をもっと奨励すべきであることを提唱しているが、妥当な考え方であると思われる。

日本が国際化するにつれ、成長してゆく今の子供たちは、これまで解答の出ていない世界の問題に直面する機会は、現在の大人たちが考えているよりも、はるかに増えていくと考えられる。

1960年代から70年代にかけて、日本でも紹介された、アメリカの心理学者 J・S・ブルナー (Jerome S. Bruner 1915-) の知識の構造と発見学習の提唱も課題解決型の学習方法の重要性を指

摘したものであった。¹⁶⁾ライシャワーもこの種の学習方法の重要性を認識していたものと言っている。

II-5 画一性から多様化へ

日本の教育の現状を国際化に沿って改革する第一歩は、大学入試を頂点とする受験制度とテスト主義の克服にあることを、ライシャワーは主張しているが、その中心主張をまとめてみよう。¹⁷⁾

日本では、小学校から高校まで文部省検定済の教科書を使い、大学では先生の一方的講義を棒暗記し、先生の意に添うような答えを書き、一度も自分で考える時期がない。試験は創造性を伸ばす方向でなく、刈り取る役目をしているように見える。

日本社会は基本的に集団志向型で、集団の中に自分のアイデンティティを見出すのが日本人の行動様式の特徴である。このような中央集権体制と社会の集団志向性が組み合わさった結果、日本の教育はどこをとっても似たり寄ったりで、ほとんど差がないという一様化現象を呈している。これまでの日本の教育に、多様性を許す度量がもう少しあったら、急速に変化する国際社会でも、今よりは上手に事態に対処できたと思う。

日本の画一的な学校制度で異質な存在は帰国子女である。世界の相互依存の深さを学び、世界の多様性を人間の目で知ることが重要である。それには、世界を丸ごと自然に呼吸してきた帰国子女の経験が、かけがえのない価値をもっている。帰国子女の教育には、従来の集団帰属的な発想や規制一点張りの管理主義でなく、幅広い見方をする教師が要求される。学校の管理職や教育委員会もその事情を理解することが大切である。

世界の現実を知るうえで、学校教育が重要な役割を担っている。そのとき大切なのは、自分の属する社会が世界に数多くある社会の一つにすぎないことを理解する教育である。アメリカの大学では、外国研究のカリキュラムの進歩には目覚ましいものがある。日本の大学でも、社会的背景や文化的伝統を含め、違った文化について詳しく学習すべき時にきている。

コミュニケーションの能力の育成の問題とも関連するが、日本人は、国際化に必要なコミュニケーションの手段としての英語力が、非常に貧困

である。その原因は日本の英語教育の貧困さによるが、日本語そのものの性質から来る問題もある。英語教育では、コミュニケーションの手段として生きた外国語を学ぶよりも、英米文学を重視する傾向が強かった。

英語が堪能な日本人が圧倒的に大勢いて、正しいナマの情報が世界中から入っていたとすると、日本は第二次大戦には突入しなかったかもしれない。

言語教育は早くから始め、日本語を媒介しないで自分の考えを表現する能力を身につけることが大切である。この能力は非常に若いうちでなければ身につかないものである。知的思考力の訓練が必要な高校の年代には、現在のような灰色の文法や単語の丸暗記に費やすのは、無駄である。近年、外国人教師を英語教師として受け入れているのはよい試みである。

このように、ライシャワーは、日本の学校教育の問題点を国際化の視点から論議している。日本の若者の創造性をうばっているものとして、画一的な教育と、客観テストに徹する大学入試を始めとする入試制度を批判している。公平と平等を重視した教育の考え方は検定教科書制度とあいまって、教育の画一化をうみだしたことを指摘している。検定教科書制度は、戦前の国定教科書制度の思想統制的な要素をなくそうとしたものと言ってよい。検定教科書制度は、教科書の質をたかめたことに役立ったとみる見方もあるが、歴史教科書の場合のように思想の方向づけではないかという批判もでてきた。いずれにしてもライシャワーが若者の創造性を育てるための教育の必要性を強調したことは評価できる。また英語の早期教育を奨めているようにみえるが、実験的に試みることを含めて、何歳ごろから始めるのがよいのか早急な検討を行うことが必要であると思われる。

II-6 国際化と日本の役割

ライシャワーは、前掲の書のおわりの方で日本がなすべき課題を提案しているが、その中心主張をみてみよう。¹⁸⁾

日本が緊急に果たすべき最大の責務の第一は、自由貿易と平和の維持である。第二の責務は、第三世界の援助である。第三世界援助は、遅れてい

る国にいくらか恵んでやるが、その額は少ないほどよいという意識で行う外交政策の一項目ではなく、日本人がその存在を賭ける未来建設の主要な事業である。援助の真の動機は同じ人間仲間としてこれらの国の人を救うことにより、自己も変換し、それによって自国も含む世界が救われることである。東南アジアに対する今の儲け一本槍の商法を変えるなら、東南アジアからの短期の利益は減るかもしれない。しかし長期的には国家全体の存続という国家保険で保護されることになる。

日本の国際化として、かれは五つの目標をあげた。経済面の国際化、社会の解放、世界を理解する能力の獲得、世界への貢献、世界共同体建設の努力、の五つを掲げ、世界共同体確立への揺るぎない信念と信頼を最も重要だと考えている。そのための教育の重要性を強調してきた。

この書の最後の章「未来への確信」で、国際化の意義について総括しているが、その点について中心主張をまとめてみよう。¹⁹⁾

国際化については前にもふれたように、次の二つの解釈がある。一つは、単に外国と接触するというきわめて広い意味の国際化である。他の一つは、世界が一つの共同体として連帯することである。この狭義の国際化は、近代化という巨大な歴史の趨勢が進行し、人類が一つの運命共同体に変容することを要求された結果、ごく最近出現したものである。地理的条件や歴史的原因から他国との接触経験が少なかった日本は、いまだに広義の国際化と狭義の国際化を混同し、相互依存によってのみ生存しうる単一世界という概念を十分に把握していない。国際化は、人類の歴史の歩みが生んだ近代化の必然的な帰結で、現代文明がその存亡をかけて日本に求めているものである。

かつての世界では適合していた国家という組織が、世界共同体という単一組織に移行しなければ、世界の運営が不可能になり、人類は生き延びられないという現実が引き起こしている変化に注意すべきである。このような人生観や世界観の座標軸を変えることが大切である。心情的反発が真の理解を妨げるのでその達成は容易なことではないが、それは可能だと信じている。国際化とは、日本人一人ひとりが、世界を共同で担う人類の一員という国際的視野をもつ人間に変容することである。

ライシャワーは、外国人と対等に意見交換が出来る「稼動する国際人」と、田舎に生活していても、テレビや読書などで学習することで広い見方をもつ必要を覚った「存在する国際人」が、共にこれからの日本では切実に必要になってくる。

これから数年先、十数年先に深刻な危機を迎え、その解決にいらだつ世界は、日本が国際化へ変容するのを待てないかもしれない。しかしライシャワーは、強い希望と確信をもって、日本が国際化する日がくるのを待つことに決めたと言う。日本人にそれができることを知っているからである。

このようなライシャワーの期待に応えることができるかどうかを疑問視する人も多いかもしれないが、日本人に課せられた問題として積極的に取り組むことが必要である。

III 国際的視野の育成

—ライシャワーの遺言

III-1 ライシャワー思想の特徴

ライシャワーは、1990年9月1日、太平洋を望むサンディエゴの家で、79歳の生涯を閉じた。海を隔てて遠くにある日本、心の中では近くにある日本のことを思いながら亡くなった。

1993年9月に、ライシャワー氏と親しかった納谷祐二、小林ひろみの両氏の著訳書『ライシャワーの遺言 — Bridge to the 21st Century — Exploring Dr. Reischauer's Thinking』が出た。284頁にコンパクトにまとめられている。日本をこよなく愛し、世界と日本を熟知し、日本によい助言をしたライシャワーの死後、あらためてかれの残した遺言に注目したい。スペースのつごうで、その中心主張を、日本の国際化とそれに対応する教育のあり方に焦点をおいてとりあげることにする。

まず、この書でもふれられているが、同氏の思想の特徴をおおまかにまとめると次の点にある。

第一は、国家という狭い枠を超えた発想である。これは多くの国でのかれの生活経験から生まれた国際感覚が基礎になっている。

第二は、物事や現象の本質を大局的に捉え、しかも、きめつけることのない抑制のきいたアプローチのしかたである。

第三は、バランスのとれた現実感覚である。これは、大学生以来永い間の日本及びアジア研究、ハーバード大学エンチン研究所長、駐日大使などの経験が生み出したものである。

III-2 ポスト冷戦と滅亡の予兆

ライシャワーは米ソの間の冷戦は終わったかに見えるが、人類の環境はわるくすると滅亡のおそれがあることを指摘して、次のように述べている。その中心主張をみてみよう。

世界は今、変化の速度を上げながら、人類が経験したことの無い生存環境に適応することを人びとに迫っている。しかし多くの人びとは、この事実気づいていない。

これから20～30年のあいだ、人類は滅亡の淵にそそり立つ絶壁の小径を、深い霧に包まれて歩き続けなければならない。核兵器の管理や制御も不安定であり、地球環境の破壊も深刻化しているのに、事態に有効に対処できる国際組織が存在しない。

第三世界は国家主義を強め、崩壊した第二世界も行き先を理解できず、第一世界ですら世界の存続よりも国益を重視している。

日本の挙動の一つひとつが、世界で問題になってきた。これは、大国になった日本と世界の安全が直接つながった結果、日本を見る世界の視線が変わった事実を示している。しかし日本は、国内だけに興味をもち、自国中心の意識で世界に対処し、世界の存続より日本の繁栄と外国にどうみられるかに関心を払っている。²⁰⁾

ライシャワーは、このように、国家主義や国益第一主義が清算されず、核兵器の管理が行われず、世界経済の構造的な歪み、地球環境の破壊の進行によって、この20～30年間に最も危険であることを警告している。

原子爆弾が広島や長崎に落とされた時、世界の人々はその脅威を理解したかにもええ。当時は油脂爆弾といって日本政府はその実状をあいまいにしたが、広島で約14万人、長崎で約7万人が一挙に亡くなった。しかしその後危険な原水爆が生産され、今やアメリカとロシア等を合わせて3万発余の原爆等が貯えられていると報じられているのに、人々は何もないかのように生活している。ラ

イシャワーの発言はこのような憂うべき状態への警告であるともいうことができよう。さらにかれは日本の一国繁栄主義を批判して次のように述べている。²¹⁾

日本人には、日本以外の国も自分の属する世界の一部とすること自体が、経験したことの無い発想である。世界の紛争を他の惑星の事件のように感じている。日本人が巻き込まれなければ、戦場で他国の若者の血が流れても、関係がないような態度をとっている。自国の農民を守ることに敏感でも、自由貿易の重要性を深く考えようとはしない。第三世界援助を掲げながら、自国企業の利益がどれだけ得られるかの還流額を計算している。

このようにライシャワーは、日本が世界の一部であるという認識がいかに弱いかを戒めている。外米輸入問題があったさい、米を一粒たりとも輸入しないのは農民のためということが宣伝されたが、外国の安い米をどうして食べてはいけないのかという問には、時の政府は十分に答えられなかった。

III-3 人類としての共感を分かちあう教育

ライシャワーは、欧米と日本との教育を比較検討しているが、その中心主張をみてみよう。²²⁾

欧米では暗記万能の教育を卒業し、事実の意味を理解して自ら考え、自分で表現する態度が称揚される。その欧米の教育も国家主義を完全には脱していない。しかし日本では、評価の定まった知識の暗記と国家主義の発想が主流を占めている。そこには古い価値観を当然とし、そこに居心地のよさを見いだす教師や教育当局や父母の後れた意識が反映している。

このように同氏は、知識の暗記主義と国家主義の発想が、日本の教育の主流を占めているという批判をしている。すくなくとも古い価値観の改革ができるかどうか、日本の教育の発展を左右することになる。

ライシャワーはアメリカの教育にも問題があったこと、それに対応して、どうしたらよいかを次のように論じている。²³⁾

かつてアメリカで教育の重要性が叫ばれたのは、ソ連の人工衛星に後れたショックや経済の落

ちこみの時であった。人種や性の差別解消を迫られた時には強力な教育改革の声が挙がらず、アメリカが軍事上劣っているかもしれないという危機感だけが、教育再建の世論を生んだ。ライシャワーは長い間、講演や著書で国際教育の重要性を力説してきた。国際摩擦が激しくなり、このままでは世界に破局しか残されていない。破局を避けるには、国際問題を公平に眺める世界市民精神を育てる国際教育が重要であることを主張した。

いわゆるスプートニック・ショックに対応して、アメリカは国防教育法(1958年)によって人材開発政策を進めたが、ライシャワーは、激しい国際摩擦をもたらす世界の破滅を避けるには、国際問題を公平に眺める世界市民精神を育てる国際教育の重要性を指摘した。この考え方は、甘いと言われるかもしれないが、これに対して教育への期待をかれはさらに次のように述べている。²⁴⁾

教育だけで世界の複雑な問題を解決できるわけではなく、教育で人類が未来を洞察できるとも断言できない。しかし人類の未来が、人びとの発想にかかっていることは確かである。たかが教育で未来が変わると信じるのは愚かだと感じる人がいるかもしれないが、ライシャワーにはその試みを放棄する方が愚かに見える。人びとが古い発想をもち、各国が国益だけを主張し続けるとき、人類には破滅しか残されていないことを明確に予告できるからである。

国際問題に対する一般の人びとの判断は、漠然とした情緒や日常経験の類推から生まれ、その情緒や経験には多くの偏見や誤解がからんでいる。世界の正確な理解は、若いころの感動と世界を知ろうとする不断の努力でしか得られない。これが教育改革の必要な理由である。

このように同氏は、国際問題を公平にみる世界市民精神を育てる国際教育が重要であることを強調している。日本のように国益中心主義に慣れてきた国民にとって、それを修正し、世界市民精神をもつようになることは至難の業である。そのことなしには世界の破滅が避けられないという警告は日本人には理解しにくい面もあるが、この警告に耳を傾け、発想の転換をすることが必要であることが示されている。そのためには国際教育が重要だと主張されているが、その国際教育では何が

大切か、次に同氏の中心主張をみてみよう。²⁵⁾

国際教育で重要な科目の一つは歴史である。歴史教育は、自国の歴史も人類の経験の一部とする視点で貫かれていることが必要である。それは、自国を他と特に違う優れた国家として描いたり、そのユニークさを強調しない教育である。戦争に勝った将軍や元帥を英雄として祭り上げないことも、その一つである。その英雄は国家が角逐していた時代の偶像ではあっても、21世紀に必要な要素ではない。より重要なのは、ある事件や問題を他の国民の立場で検討することである。また国家の衝突や摩擦は人類全体の立場に立つ以外に解決できなくなった現実を教えるのが、歴史教育の目的である。

21世紀に自己中心的な国家主義を振りかざす国は、世界で重きをおかれぬであろう。21世紀世界は、軍事力や経済力の強大さでなく、世界への貢献度が、国家の偉大さを計る尺度になるからである。

このようにライシャワーは、国際教育の重要性を述べ、その中でも歴史教育の大切さを指摘している。日本の歴史は、戦前、世界に冠たる歴史として若い世代に注入されてきた。戦争に勝った将軍が神社であがめられているし、戦争に負けても、戦争を指導した人物が靖国神社で神として祭られている状況は、ライシャワーはもちろん、アジアの人びとの中で、日本の軍隊にいためつけられた人びとにとっては理解しにくいことである。近年、戦争中の日本軍の行動について反省をもって書かれた教科書や著書もでてきたが、逆にそれをも自虐史として、大東亜戦争聖戦論が台頭しつつある状況を見ると、日本の国際化の道は遠いという感じをもつ人も多いと思われる。

III-4 マスコミと国際化

マスコミも、ライシャワーが考える世界存続の課題に重要な役割をもっている。この認識から、かれはマスコミと国際化について次のように論じている。²⁶⁾

学校だけでは、急を要する世界存続の課題に間に合わない。マスコミも国民の意識改革に重要な教育機能をになっている。

日本のマスコミは、他国の紛争には、世界の視

点で問題点を明確にするよりも、第三者的態度をとろうとする。

学校では国際的な発想を教えられず、社会でも国内問題への関心が強いので、多くの人は、目につきやすい事件が大きく扱われているあいだは興味をもって、ショッキングな感じがなくなると急速に関心を失ってくる。

マスコミに意見を発表し、人びとに影響を与えるのは、評論家や学者など知識人と呼ばれる人びとであるが、世界の視点で事態を解説する知識人はごくわずかである。日本的心情の強い現状では、日本という国家や国益の視点に立つほうが一般に理解されやすく、受け入れられるからであろう。しかしこの人たちの責任は、一般受けで埋め合わせられないほど大きなものがある。

ライシャワーはこのように、日本のマスコミの性格を論じている。マスコミは人びとの意識に影響を与えるが、逆にマスコミも人びとの関心によって左右される。利潤で動かされる多くのマスコミ、特にテレビや週刊誌は、珍奇さや面白さを求める大衆の圧力や意見を受け、目先の情報や娯楽を供給することはあっても、人びとの発想を変え、世界的視野を与え、思考力を高める機能を果たしていない。特に採算に制約されるテレビや週刊誌の場合、その番組の主流は、スポーツや芸能界の裏話、演歌、犯罪物語などが占め、政治問題や国際問題の扱いにも、国際的視野に欠けた傾向が強いように考えられる。

III-5 日本の課題

ライシャワーは、この書のおわりのところで、これからの日本の課題として次の七つをあげている。²⁷⁾

1. 国際貢献の原則確立が出発点……世界平和への明確なビジョンをもつこと
2. 世界構造を洞察した外交を……自主的判断をもち民主主義の尊重
3. 貿易不均衡の自己是正を……世界経済システムの擁護者となること
4. 国際秩序にイニシアティブを……国際社会に対応する世界の視点にたった政治原則にたつこと
5. 人類存続の哲学をもつ安全保障……世界秩

序維持の哲学の創造

6. 環境破壊防止も第三世界援助の一つ……地球的視野の洞察力と官僚に対する統制力を強めること

7. 第三世界国民の福祉向上が援助の基本…共同で援助案を作成し、第三世界の人びとの創意を生かしながら実行し、結果を評価すること

要は、日本一國繁栄主義や経済第一主義から脱却することが大切であることを同氏は強調している。

さらにこの書の最後の部分でライシャワーは次のように述べていることに注目したい。

「私は最近、一人ひとりの人間が現代を深く考えることでしか、世界は存続できないと感じるようになりました。世界を考えることは、現代に生きる人間の過去と未来の人類に対する責任で、とくに先進諸国の人びとの逃れられない責務です。先進工業国が世界経済に大きな影響をもつだけでなく、先進諸国のシステムは民主主義以外にはありえず、民主主義は一人ひとりの有権者の意識が最終決定権をもつからです。人類の歴史において、これほどこみいった問題が、これほどの危機のとき、これほど多くの人間の叡智を必要としたことはなかった。」²⁸⁾

ライシャワーは、世界の危機についての意識を明確にもち、日本人もその叡智をたかめる必要があることを、遺言の最後のことばとして次のように述べている。すなわち人類の滅亡と繁栄を分ける瞬間に、世界の大国としてスポットライトを浴びた日本は、指揮台に立つ十分な能力と重い責任をもちながら、古い発想に縛られて世界の観客の前で立ちすくんでいると、かれは述べている。²⁹⁾

この著書が出されてから七年経過した。近年、古い発想が転換され改革された面もあると思われるが、日本人の発想や思考様式の現実を検証しその反省にたつて、21世紀の課題解決のため、人間の叡智をたかめる必要がある。

IV 歴史を心に刻む

—過去の反省と民族共生の倫理観

ライシャワーと同じく、あるいは同氏以上に、過去の歴史を直視し、人類の和解を強調したのは、R.

von. ワイツゼッカー (Richard von Weizsäcker (1920-) である。かれは1990年統一ドイツの大統領として活躍した。

ワイツゼッカーは、西ドイツ大統領の時、1985年5月8日ドイツの敗戦40周年にあたって、連邦議会で歴史的な演説を行っている。特にその中の次の一節は有名である。

「過去に目を閉ざす者は結局のところ現在にも盲目となります。非人間的な行為を心に刻もう(erinnern)としない者は、また新しい感染の危険への抵抗力をもたないことになるでしょう。」³⁰⁾

このように同氏は過去の歴史に目を閉ざし、過去に犯した非人間的行為を心に刻もうとしない者は、再び同じ危険を犯すことになりがちであることを警告したものである。

同氏は、大統領をやめた後、1995年8月に来日し、8月7日東京での講演「心に刻む歴史—ドイツと日本の戦後五十年」で、歴史を心に刻むことの大切さを説いた。

「自らの歴史(第二次大戦の歴史)と取り組もうとしない人は、自分の現在の立場、なぜそこにいるのかが理解できません。過去を否定する人は、過去を繰り返す危険を冒しているのです。」³¹⁾ 日本とドイツが、この前の大戦とその結果についてどんな反応をみせてきたかの間に答えて、こう言っている。日本はドイツに比べて隣国の不信解消に成功していないことを示唆している。

「誠実かつ率直に過去と向かい合うことは、遠近の隣人との信頼にみち、国民としての利害にもっとも役立つ協力関係にプラスの作用をもたらすもので、このことをわれわれは経験で知っています。」³²⁾ 過去との関係で隣人や全世界との信頼関係を打ち立て強固なものにすることが、両国にとってきわめて重要であることを指摘した。

また1995年8月14日、名古屋で行われた「歴史に学ぶ—新たな50年に向けて」のシンポジウムの冒頭スピーチで、寛容の精神の中で他民族と生きようということと呼びかけた。とくに日本の若い人たちに向けて次のように訴えているのが印象的である。

「若い人たちは、過去のことがばかり指摘されると混乱することがあると思います。現に若い人たちが過去に責任をもっていないことは明白であり

ます。しかし隣国の人たちは、私たちに対し、第二次大戦からくる不信感を持っています。だからわが国の若い人たちは、不信感がなぜ生まれたかを理解することが必要です。……若い人たちが隣国の若い人たちにどういう歴史像が与えられているかを学ぶのは、非常に意義深いことだと考えます。」³³⁾そこでヨーロッパでは、EU(欧州連合)の中で統合された歴史の教科書を作る試みがなされてきた。日本ではこの種の試みはなかった。

「他の民族と寛容の精神の中で生き、さまざまな文化と出会い、その出会いが暴力の衝突にならないようにすること、それは言うのはやさしいが、実現するのは難しい。しかしこのことが未来に向けての最も大切な任務だと考えます。」³⁴⁾

このようにワイツゼッカーは、寛容の精神の中で生き、他民族との共生の努力をすることが重要であることを述べている。かれが民族共生の倫理観を強調しているところに重要な特色がみられる。

またワイツゼッカーは、アメリカの政治学者サムエル・ハンチントンの「文明の衝突」は、アメリカの文化の優位を説いている点を批判し、相異なる文化間の衝突を避けるべく相互に学び合う過程こそが文明であることを強調している主張にも注目すべきである。³⁵⁾

異質な文化、異質な民族の排除に陥りがちな日本人の思考様式の改革こそ、21世紀を迎えた日本人の大きな課題であると言うことができる。

注

- 1) E. O. ライシャワー・納谷祐二・小林ひろみ『日本の国際化—ライシャワーとの対話』文芸春秋社、1989.
- 2) 同上 289-307頁。
- 3) 同上 332頁。
- 4) 同上 451-452頁。
- 5) 同上 545頁。
- 6) 同上 542頁。
- 7) 同上 544頁。
- 8) 小林哲也『国際化と教育』放送大学教育振興会、1995年、10頁。
- 9) 黒柳晴夫「生涯学習と国際教育」田浦武雄編『現代教育入門』福村出版、1995年、142頁。

- 10) 佐藤郡衛『新訂 国際化と教育—日本の異文化教育を考える』放送大学教育振興会、1999年、9-10頁。
- 11) E. O. ライシャワー 前掲書 320-328頁。
- 12) E. O. Reischauer, *Toward the 21st Century: Education for a Changing World*, C. E. Tuttle, 1973, pp. 175-176.
- 13) ライシャワー『日本の国際化』330-355頁。
- 14) 同上 386-388頁。
- 15) 同上 395-438頁。
- 16) 田浦武雄「ブルーナー理論を今日どうとらえるか」日本教育方法学会編『教育方法7』1975年、22-31頁。
- 17) ライシャワー、前掲書 441-467頁。
- 18) 同上 531-538頁。
- 19) 同上 539-546頁。
- 20) 納谷祐二、小林ひろみ著訳書『ライシャワーの遺言』講談社、1993年、12頁。
- 21) 同上 41頁。
- 22) 同上 192頁。
- 23) 同上 193頁。
- 24) 同上 194頁。
- 25) 同上 196頁。
- 26) 同上 201頁。
- 27) 同上 204頁-241頁。
- 28) 同上 283頁。
- 29) 同上 284頁。
- 30) 『荒れ野の40年—ヴァイツェッカー大統領演説』岩波ブックレット、1986、16頁。
永井清彦編訳『ヴァイツェッカー大統領演説集』岩波書店、1995年、10頁。
- 31) 東京新聞戦後50年取材班編『改訂 新版心に刻む歴史—ドイツと日本の戦後50年 ワイツェッカー前独大統領講演全録』東京新聞出版局、1995年、20頁。
中日新聞社編永井清彦訳『ヴァイツェッカー日本講演録 歴史に目を閉ざすな』岩波書店、1996年、56頁。
- 32) 同上 『心に刻む歴史』34頁。『歴史に目を閉ざすな』80頁。
- 33) ワイツェッカー「歴史に学ぶ—新たな50年に向けて」中日新聞、1995年8月15日号。
『ワイツェッカー日本講演録 歴史に目を閉ざすな』128-129頁。
- 34) 同上 中日新聞、1995年8月15日号。
『歴史に目を閉ざすな』131頁。
- 35) ワイツェッカー氏会見詳報「文明とは相互理解の過程」中日新聞1999年4月23日号。

Internationalization and Japanese Way of Thinking

Takeo TAURA*

In order for Japan to take on a vital role in the coming era, internationalization of Japan will be of vital importance. Internationalization will be required to promote the positive points of the Japanese way of thinking and to remedy its defects.

In this article I will discuss the following four topics:

1. Internationalization of Japan
2. Internationalization and education
3. Cultivation of international outlook
4. Impressing problems and lessons of the past history on our minds

In the work *Internationalization of Japan* by Dr. E.O. Reischauer he advocates that Japanese people tend to think they are unique and tend to have the way of group oriented thinking. These thoughts and attitudes prevent Japanese people from realizing internationalization.

In order to promote internationalization of Japan, I think that democratic and creative education has important roles and the cultivation of international outlook is very vital problems for Japanese people.

Richard von Weizsäcker (former President of Germany) suggests that impressing the lessons of the history of the Second World War upon Japanese people's minds and ethics of coexistence of world citizens are especially important in the coming age, in his lecture *Fifty Years after the War for Japan and Germany*. His lecture was held at Tokyo Toranomon Hall in 1995.

In order to realize the internationalization of Japan, I think that Japanese should adopt the way of humankind oriented thinking in stead of extreme nationalistic or egoistic ways of thinking and the exclusion of heterogeneous cultures.

キーワード：国際化、思考様式、多様性、他民族との共生、集団志向性